

中川未來著

## 『明治日本の国粹主義思想とアジア』

中野目 徹

本書は、二〇一四年に京都大学から博士号が授与された論文を「原型」にした論集で、序章と終章のほか本論五章と補論二本から成っている。著者の中川未來氏は、同大学のご卒業で、現在は愛媛大学に勤務する若手というよりも、もはや中堅の日本史学専攻出身の思想史研究者である。早速目次を掲げ、本書の全体像を示しておく。

### 序章 国粹主義研究の視角

#### 第一部 国粹主義グループのアジア認識枠組み

第一章 「東方策士」 稲垣満次郎の対外論と地域社会

第二章 志賀重昂と稲垣満次郎の南洋経験

第三章 高橋健三の国粹主義と東アジア秩序構想

補論一 国粹主義と近代仏教

#### 第二部 アジア認識の形成とメディア

第四章 「東学党」報道と陸羯南

第五章 内藤湖南の台湾経験

補論二 植民地統治初期の台湾とメディア

終章 明治日本の国粹主義思想とアジア

各章・補論のすべてに付されているサブタイトルを省略したの内容をつかみにくいかもしれないが、本書は稲垣満次郎、志賀重昂、高橋健三、陸羯南、内藤湖南の五人を「主人公」にして「国粹主義グループ」のアジア認識の解明を目指す、一見して骨格のしっかりとした実証性に富むモノグラフとなっている。

二〇一四年に公刊した拙著『明治の青年とナショナリズム』（吉川弘文館）の終章では、「国粹主義」に関する思想史研究の残された課題の一つとして、「国粹主義」が「亜細亜主義」へ転回していく動機や論理の究明を挙げておいた。それから二年も経たないうちに本書が上梓されたことに、評者はある種の脅威と好感の入り混じった期待を抱き、読後考えさせられることも多かった。ので、請われるままに書評の筆を執った次第である。以下、本書の内容と成果を整理し、ついで疑問点を提示するという順で批評を加えていきたい。

\*

序章は明治二十四年（一八九二）七月七日、東京・九段坂上の富士見軒で開催された東邦協会創立祝賀会から起筆される。そして、この東邦協会（「とうほうきょうかい」とルビが付される。英語表記 The Oriental Society）は、役員構成から見ても日本新聞社や政教社の関係者＝著者の中川氏がいう「国粹主義グループ」を「中核とする団体」（三頁）であり、創立の「趣旨」には各国民がそれぞれの特性を発揮することで「世界の文明進歩」に寄与するという「思考の枠組み」（四頁）が存在していたと指摘する。ついで同協会の会員名簿（会員のなかに稲垣と内藤の名前はな

評

書

い)、出版書目表、講演活動表が掲げられる。東邦協会に關しては故安岡昭男氏の基礎的研究があるが(朝井佐智子氏による最新の研究もあるらしい)、開卷劈頭から考察の範圍を「東邦協会の時代」とし、先の五人をもって「国粹主義グループ」と括ったことの適否が、本書を評価する場合の第一の論点となろう。

課題と視角を論じる第二節の冒頭では、本書の目的が「東邦協会という場を共有していた国粹主義グループにおいて、いかなるアジア認識が、いかにして形成されるのか。その過程を先に掲げた五人の人物の言論活動に即して明らかにすること」(二三頁)だと明言される。また、「一八九〇年代の国粹主義思想を、近代日本のアジア認識のなかに位置づける試みである」(同上)とも言い換えられる。そして、「国粹主義」から「亜細亜主義」への「転回の内在的論理をより包括的なかたちで説明することが必要」(一八頁)だとされていることに対しては、評者も全く同じ課題を抱いてきて、いまだに確答を得られていない。この転回の論理の内在的説明が十分に説得的になされているかどうか、これが第二の論点となろう。

本書の課題はまた、次のように換言される。「本書は、人口移動の増大と対外戦争・植民地領有により日本社会で生活する人びととアジアの向き合い方が問われはじめた一八九〇年代のアジア認識のかたちを、国粹主義を通して位置づけることを目的とする。そのための課題は、国粹主義グループにおいて共有されたアジア認識の枠組みを抽出し、それがどのように形成されたのか、そして実際の対外論においてどのように作用したかを検証することである」(二一

―二二頁)。この「アジア認識の枠組み」として、著者は「①世界各地の国民・民族の文化的多様性を承認し、それぞれに独自の「国粹」を保持発達させることが世界文明への寄与に繋がるという発想」、「②日本を中心にアジアないし東洋を結集し、西欧国際体系に対抗するという地域秩序構想」、さらに「③アジア認識をかたちづくる際に参照される情報がどのような過程を経て主体へ辿りつくのかを、新聞メディアの働きを通じて明らかにすること」の三点を挙げる(二二頁)。

右のうち①については、評者のものも含めた先行研究において、「国粹主義」の論理がアジアの諸国・諸民族に対して貫徹されていないことが指摘されており、②についても、いわゆる東洋盟主論の問題として、例えば福澤諭吉の「脱亜論」との関係をめぐる坂野潤治氏などによる多くの議論が積み重ねられてきている。したがって、③の新聞メディア論も含めて、「アジア認識の枠組み」をめぐる著者によつて提示された三つの視角の課題説明に果たす妥当性の吟味ということが、第三の論点となるだろう。

\*

序章では本書を解説するための重要な論点が開陳されているため、引用も含めて若干詳しく取り上げたが、第一章以下の本文については、終章において著者自身によつて的確に要約されているので、むしろここでは注目すべき指摘を絞って紹介していきたい。

第一部「国粹主義グループのアジア認識枠組み」に配された第一章では、『東方策』(明治二十四年)の著述によつて一躍「東方

問題」の第一人者となった稲垣満次郎（一八六一―一九〇八）を取り上げる。J・R・シーリーの『英国の膨張』（*The Expansion of England*, 1883）に学んだ稲垣の、とくに南洋（オセアニア）発見を媒介として活性化した対外論が京都（そして宮津。神輿知常の地盤である）という特定地域の産業振興策と結びついていたという指摘は（六一頁）、評者も志賀重昂の場合に即して考察したこともあるが、「国粹主義」を標榜した思想運動の具体的な展開を実証する試みとしてたいへん有意義であろう。当該期の稲垣に関する史料の悉皆的調査や地域史料の発掘にも見るべきものが多い。

第二章は、稲垣と志賀重昂（一八六三―一九二七）の南洋経験が対比的に論じられている。その際、明治十九年に南洋航海を行なった志賀の「国家より大なる一種の大団体」という発想が、「欧羅巴主義」に対抗するための「南洋連邦」構想にヒントを得て「亜細亜主義」という地域秩序構想に至るといふ著者の指摘は、従来の研究にない新しい提案である。評者は、志賀の場合、南洋経験が「国粹主義」の主張を生み出す一つの契機となり、それがさらに「亜細亜主義」に転回していくと考えるが、この点はいかがであろうか。一方、稲垣の場合、明治二十五年から翌年にかけての南洋航海によって、植民と貿易という経済的方策（中国を中心とする交易圏への接続）に関心が向かい、また、モンロー主義の考え方を発見・援用することで、日本が北太平洋で覇権を握るべきだと主張したという。本章を読んだ評者の印象としては、志賀と稲垣の「国粹主義」理解と南洋経験の成果は総じて似通っているように思える。章末で、「明治中期の国粹主義思想は（中略）

環太平洋地域におけるナショナリズム運動の文脈に位置づけることも可能」（二二頁）という指摘は傾聴に値するだけでなく、今後の「国粹主義」思想史研究の方向性を示唆するきわめて重要な指摘である（その意味でも註120）が重複しているのは残念）。

第三章では、「国粹主義グループ」のなかで第一世代に属する高橋健三（一八五五―一九八）が取り上げられる。そもそも「国粹主義」の思想運動のキー・マンの一人と考えられながら、杉浦重剛などと較べても、高橋が研究対象として取り上げられること自体これまで全くなかった。そのような意味でも本章は意義深いものである。評者は、本章の構想が日本思想史学会で発表されたときから、その文章化の早からんことを望んでいたもので、ようやくここにそれが実現したことになる。本章でも、高橋の著作等史料の悉皆調査に基づいて、思想形成から官僚時代を経て『大阪朝日新聞』に至る過程が詳述されるが、なかでも高橋にとつて情誼的「社交」関係を結んだ個人の結合体が「社会」であり、そのような「社会」を律する規範が「人道」であるという基本認識を有していたという評価は重要である。他方、国際関係とりわけアジア論においては、「東邦」固有の規範という独特の国際法理解に基づく「東亜同盟」構想を主張したという。高橋の死後そのような構想は内藤湖南らに引き継がれるというが（二七〇頁）、継承関係の解明は今後の課題として残される。

ここで、「国粹主義」と近代仏教の関係を考察する補論一が挿入されている。「国粹主義グループ」でもとくに政教社のメンバーと仏教改良運動の動向との関連については、つとにその解明の必要性が認識されながらも、従来は本格的な研究がなかった。

したがって、辰巳小次郎を主として検討する本章は、前章に続いてそれ自体貴重な試みである。とくに、真宗系の海外宣教会の活動を紹介する本章後半からは示唆を受けることが多く、今後の本格的な検討が期待される研究領域である。

以下、第二部「アジア認識の形成とメディア」に入る。第四章では、日清戦争開戦直前の明治二十七年六月を中心に、朝鮮半島における東学党のイメージがどのように形成され変容していったかというメディア史的問題を、現地のメディアと同時期の日本の新聞報道を悉皆的に分析することを通して、そのなかにおける陸羯南（一八五七〜一九〇七）の位置を明らかにしようとする。しかし、分析の結果、「極めて現実的な政策提言」（二二六頁）と評価された陸の立論であるが、秘密外交や軍事機密が当然とされた当時、民間ジャーナリストが接しうる情報は限定されており、むしろ「現実」や「政策」とは異なる次元で思想の評価はなされるべきではないだろうか。

第五章では、内藤湖南（一八六六〜一九三四）の明治三十年から翌年にかけての台湾滞在経験の意味が、「国粹主義」との関連で問われる。内藤の台湾渡航は『台湾日報』主筆就任のためであった。明治二十年代の日本において「不平」を払拭できなかった内藤が、日清戦争の勝利によって「自信」を取り戻して台湾に赴任するという中川氏の指摘は面白い。そのような内藤の渡台後の台湾論は、内地延長主義による日本の「特殊の文明」による植民地化を志向していたという。本章の「おわりに」で述べられている「国粹主義」と「日本の国民的使命（天職）」についての著者の結論は、本書全体にとっても重要であると思われるが、初期の

「国粹主義」思想のなかには植民地経営を含む対外論は存在しないのであって、したがって、内藤の論説「所謂日本の天職」（明治二十七年）の位置づけも、日清戦後の初期「国粹主義」との関連にも首肯できるものの、日清戦前の初期「国粹主義」との関連でいえば、かつて評者が試みたような、その思想的生産性を継承する独自の文明論を内包する主張という評価にも一定の意味があると思う（二七二頁）。

最後の補論二では、上記『台湾日報』と同時期に発行されていた『台湾新報』を比較して論調の違い、すなわち前者の「同化」主義、後者の「差別」主義が明らかにされる。

\*

終章では、五人の思想を中心に「国粹主義グループ」の「ことばと行動の軌跡」の解明を通していかなる「事実」が明らかになったのかということが総括される。「ことばと行動の軌跡」と「事実」の解明こそ中川氏が一貫してこだわってきたことであり、ここに本書を執筆した著者の基本的立場＝日本史学の方法とそれによる成果が揚言されているといえよう。各章ごとの総括は繰り返さないが、本書は総体として、「国粹主義グループ」のアジア認識をさまざまな側面から照射し、それを立体的に再現するとともに、一八九〇年代という時代状況のなかに位置づけ、また時代そのものの特質の一端を明解に描き出した作品となっている。その手法も日本史学の王道を往くもので、とりわけ人物史料、地域史料そして新聞・雑誌史料の調査と解釈上の操作に関しては見るべきものが多い。著者の史料に向き合う姿勢は、評者が国立国会

図書館憲政資料室で出会った若き日の故高橋秀直氏が見せていた姿に通じるものがある。

そのような本書の意義を十分認めたいうえで、先に挙げた三つの論点に即して、疑問に感じたことを提示しておきたい。

第一に、本書全体を「東邦協会の時代」と括ったことの適否についてである。それはとりもなおさず、本書で「国粹主義グループ」とされた五人の「主人公」の選別についての適否にも関わる。五人は高橋の一八五五年生まれから内藤の一八六六年生まれまで、いわゆる「明治の青年」世代に属するが、すでに論じたなかでもおおよそ明らかなように、本書の論述の中心は五人のうちでも稲垣、高橋、内藤の三人である（この三人に関わる各章は本書中の白眉といえる）。このうち稲垣と高橋の二人は政教社員でも日本新聞社員でもない。おそらく本書を手にした読者が均しく感じるであろう違和感は、「国粹主義グループ」という括り方によっては上手く五人の像を結ぶことができないうことではないだろうか。

評書  
一方、「東邦協会の時代」という括り方も、序章と終章での叙述に集中していて、第一章から補論二までの本文中では十全に機能しているとはいえない。一八九〇年代のアジア認識を吟味する場として東邦協会を設定したのは至当だが、本書全体を通読したとき、せっかくの場が生かされていないように感じるのは評者だけであろうか。東邦協会に関しては、同協会のアーカイブズに該当する史料が存在しないため、会報等の断片的な史料から、その活動を再現していくしかない。「東邦協会の時代」という枠組みを活かす工夫があつて然るべきではなかっただろうか。（蛇足な

がら記せば、三宅雪嶺の伝記研究のなかでは、日清戦争開戦直前に東邦協会から派遣されて朝鮮半島視察に出かけたことになつているものの、管見では外務省外交史料館所蔵の記録のなかにもその痕跡となるような史料は見当たらず困惑していた。ところが、本書二二三頁に掲げられた図9の写真には、三宅雪嶺がちやつかり写っているのではないか。感謝申し上げる。）

第二に、本書の各章・補論での考察によつて「国粹主義」から「亜細亜主義」への転回の内在的論理が包括的に解明されているかどうかという疑問である。これに関しては、著者の提示する三つの「アジア認識の枠組み」が、本書の目的の達成、課題の解明のため妥当なものかどうかという第三の疑問と合わせて考察を加えるべきであろう。

ここでまず気になるのは、「国粹主義」とされた思想の理解がやや一面的ではないかということである。各「国民」が「特性」を發揮することが「世界文明」の発展に繋がるとするのは、「国粹主義」思想の最大公約数的な定義ではあるが、政教社の「国粹主義」に関しては提唱後少なくとも一年おきに見直しがなされているし、原理論と状況論が各場面において自覚的に使い分けられている。新聞『日本』で展開された陸の「国民論派」も、当時最新の「政論」の一つとして主張されたものであった。他方、「亜細亜主義」に関しては、少なくとも興亜会（後の亜細亜協会）が設立された明治十三年（一八八〇）あたりから考察を始めるべきではなかったか。そして、日清戦後の「支那保全論」と東亜同文会設立の明治三十一年までは着実に視野に入れておくべきではなかつ

たか、ということである。もう一点、「国粹主義」から「亜細亜主義」への転回の時期の特定がなされていないことも気にかかる。評者の見るところ、その転回は明治二十四年を中心に緩やかに進んだと思われるが、いかがであろうか。

「アジア認識の枠組み」に関しても若干の疑問が残る。一つは、南洋や台湾に関する議論は紹介されたが、肝心（と思われる）の中国と朝鮮に関する議論が抜け落ちていることである。二つめには、稲垣が対外硬運動に参加せず（五六頁）、高橋が大日本協会に加入しなかった（一五五頁）ことの意味を問はず必要にについては。日清戦争そのもののインパクトを含めて、この時期のアジア認識をより正確に把握するために考慮に入れなければならぬ大小のフアクターは、本書で検討されているよりも多いように思われる。

以上のような疑問は残ったものの、本書が「国粹主義」思想の研究を一步も二歩も前進させるもので、研究史上に独自の位置を占めるのと同時に、アジア主義研究の潮流にも裨をさして、二十世紀以降の激動する対アジア関係の背後にあった世界観の前提条件を提示するという、二つの意味で優れた研究成果であることは疑いない。そのような大きな議論とは別に、稲垣や高橋、そして台湾時代の内藤などに加え、これまでは名前もよく知られていなかったものの、彼らの周辺に確かに存在していた「国粹主義」者や「東方策士」たち、あるいは実業家などを炙り出したことも、本書の忘れてはならない成果であろう。あえて幾つかの疑問を呈したのは、これを機に研究の一層の深化が図られることを望んだことであり、一人でも多くの読者が本書を手にとって充実した

内容から多くのことを学び、「国粹主義」とアジア認識をめぐる議論に参加されることを願っている。

（A5判 三四二頁 二〇一六年二月 吉川弘文館

一〇〇〇円＋税

（筑波大学人文社会系教授）